

GREEN EARTH 緑の地球

1992・7
6

- 絵はがき・テレカの普及を！……………P 2
- ブラジル環境サミット報告……………P 4・5

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

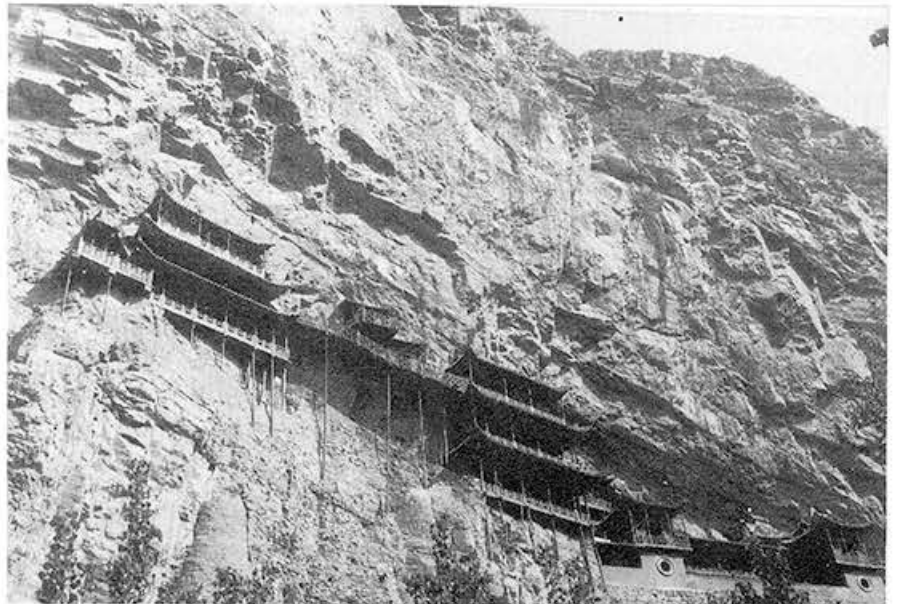
COM21 通巻300号 発行/COM企画室

毎月1回15日発行
定価/150円
年間購読料/2,000円
(送料共)

編集/緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network
大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739 (☎552)
郵便振替 大阪 4-128465



悠久の歴史を伝える黄土高原の村落



断崖につくられた懸空寺(7世紀の創建)

絵ハガキ・テレカの普及にご協力を！



1970年代に青年たちが植えたカラマツの林



戦火に焼かれた緑をとりもどす北岳・恒山



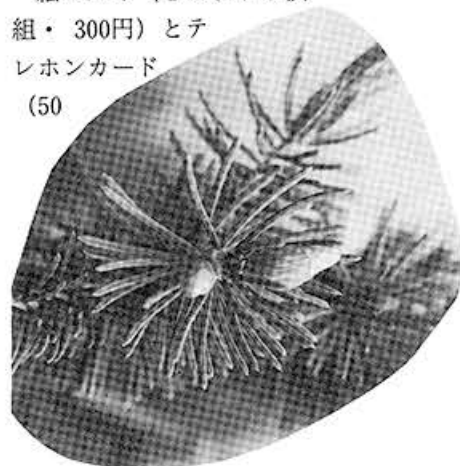
中国山西省雁北地区で行われている、緑化への努力を紹介し、広く協力を呼びかけるために、緑の地球ネットワーク準備会は、①写真パネル、②絵ハガキ、③テレホンカードを準備中です。

北緯40度、海拔1000ないし2000メートル、分厚い黄土層におおわれた一帯の自然は、日本の私たちの想像を越えた過酷さと魅力をそなえています。またそこで数千年にわたって続いてきた人びとの生の営みは、数年まえから始まった緑化への努力とあいまって、私たちにさまざまなことを訴えかけてきます。

写真パネルは15枚前後で、人の集まる所などこでも展示し、緑化協力を訴えたいと思います。

絵ハガキ（1セット6枚組・300円）とテレホンカード

(50



度数・1000円、2種類）も趣旨は同じですが、販売収益を中国緑化基金、とくに苗木代として現地に贈ります。

おおざっぱな計算では、絵ハガキ組を買ってもらうことによって、唐松苗なら100本、障子松なら20本、ポプラの大苗なら2～3本を贈ることができます。詳しくは次号で紹介しますので、みなさんの積極的なご協力をお願いいたします。

4 IN 0 1 5 10 30 50



TELEPHONE CARD 50

こんなテレカもできています。第一次協力団団員の鳥屋さんが記念つくったものです。

サマー・ワーキング・ツアー8月1日出発

第1次緑化協力団の成果をふまえ、第2次緑化協力団・サマーワーキングツアーが8月1日、山西省渾源県に向けて出発します。

今回は渾源県に5日間滞在し、西留郷、恒山、除町郷等で実際の植樹作業に参加し、現地の人びとと共に汗を流したいと思います。「1日中でも木を植えたい！」と今から闘志満々の若い団員もいます。14日には第1回の団会議をもち、現地での具体的な行動について意見を出し合いました。

団のメンバーは、
団長 武田 繁典 48歳 高校教員

秘書	林 靖介	38歳	GEN
団員	大久保太一	49歳	内科医師
団員	長井真知子	43歳	図書館司書
団員	山内ちづ子	43歳	中学校教員
団員	赤司 敏紀	43歳	中学校教員
団員	松本 清	40歳	高校教員
団員	西森 政行	22歳	大学生
団員	久保 朋子	22歳	会社員
団員	喜多 亮夫	20歳	大学生
団員	武田 公一	19歳	大学生
団員	加茂わかな	19歳	大学生

※なお、8月26日（水）午後6時30分より大阪港区民センターで「帰国報告会」を行います。

みんな熱中して木工に挑戦 間伐問題の深刻さを学ぶ

木や緑に実際に触れることで森林の大切さを知ってもらう第2回自然と親しむ会「間伐材を使った木工細工」が、6月28日、河内長野市の同市立林業センター「木根館（きんこんかん）」であった。緑の地球ネットワーク会員や新聞の告知欄を見て申し込んだ非会員ら約20人が参加、『都市型林業』を目指す河内林業の現状を聞いた、木工細工を楽しんだ。

河内林業地は府内では北部の能勢地



さて、仕上がりは？

域と並ぶ最大の林業地域。河内長野市を中心にスギ・ヒノキの混交密植造林が約13,000ヘクタールにわたって広がっている。約300年の人工造林の歴史を持つが、ここ20年は輸入材による木材価格の低迷や労働力不足で間伐ができずに放置された山が目立つようになってきている。

午前中、同館を管理している同市森林組合の奥野豊課長が「40年生までの間伐材は一本数百円。20年前とほとんど同じ。労賃も出ず、山が放ったらかしにされている。大雪や台風の時に災害を生み、さらに山の荒廃をもたらす」などと説明。厳しい現状に参加者からため息がもれた。しかし、消費地に近い地の利をいかし、消費者への啓蒙を通して木材の消費拡大、間伐材を使った付加価値商品の開発を進める都市型林業



山に入って間伐の様子を見る

への取り組みに関心が集まった。

午後からは近くの山に入り、伐採された間伐材が横たおしになったままの様子を見学。その後、同館に戻り、小型イスやおもちゃの汽車など、係員の説明を聞きながらそれぞれ木工細工を作った。家族で参加したある主婦は「日本の林業の勉強もできたし、木工細工で子供たちも楽しめた。ぜひ次回も参加したい」と話していた。

住民の智恵で乱開発を阻止 ゴルフ場なんていらん！

ゴルフ場の予定地内に田んぼを造ったり、「立木トラスト」運動を提唱してゴルフ場建設に立ち向かっている人たちがいる。温泉リゾート地として有名な和歌山県白浜町で小学校の先生をしている藤田真知男さん（56）ら住民有志でつくる富田の自然を守る会。

白浜町の東南部に位置する富田地区に「白浜オーシャンリゾート」と称するゴルフ場の誘致計画が持ち込まれたのは急死した前町長の時代。赤字経営に悩む山林所有者の財産組合の一つがゴルフ場開発会社に財産権を売り渡したのが始まりだった。熊野古道沿いに南北に傾斜のきつい山林が広がるこの地域は、あの西武でさえ「ゴルフ場に不適」と3年前に撤退を決めた所。山頂から35mも切り下げ270ヘクタール、27ホールゴルフ場を造成する今回の計画は約700万㎡の土砂を動かすことになっており、深刻な開発汚染が

早くから指摘されていた。住民の間で一番早くゴルフ場反対を決めたのは、造成工事の土砂が流れ込む袋湾の富田浦漁協だった。鯛や伊勢えびの漁場を抱える漁師の生活がかかっていた。触発されて藤田さんたちがゴルフ場反対の住民署名運動を始めたのは今年の2月。あっという間に300人の署名が集まり町長と議会に提出。それからたたかい方に智恵をこめた。現地に農地を所有する藤田さんは水田を復元して水利権をタテに抵抗することを思いついた。住民参加の立木トラストも6月から始めた

がもう170人が参加している。それでも乱開発は止まらない。悪名高い「リゾート法」によって今やゴルフ場開発を止めることができるのは被害の矢面に立たされる住民とこれを支持支援する環境保護団体の反対運動だけだといわれるのもそのためだ。

藤田さんらの努力の結果、二つの山林財産組合の一つが最近、臨時総会を開き圧倒的多数でゴルフ場反対を決議した。「9回裏逆転ホームランや」と藤田さんは会心の笑みをもらした。



復活した藤田さんの田んぼ

地球サミットに参加して

西島 誠 (青年会議所副委員長)

成田空港を飛び立ち、約30時間の飛行機の旅が終わり、ブラジルのリオデジャネイロについた。第一印象は、この国は、戦争でもやっているのかと思うほど警戒が厳重でありまして、初めて戦車を目の前でみたほどでありました。もっと残念であったのが、軍隊の人たちの機関銃が、私たち旅行者や市民にむけられたということです。非常に印象を悪くしてリオデジャネイロに着いたわけですから。私たちは、政府間レベルの会議に出席をしたのではなく、非政府機関(NGO)の会議「グローバルフォーラム」に出席したのでありますが、実際どここのメディアにも、地球サミットだけが大きく取り上げられ、私たちの会議は、少ししか取り上げられませんでした。今回のこのフォーラムに参加した団体は、世界中から約1500の団体で、日本からは約30の団体が参加をし、民間レベルでの会議をし、そしてまた、フラメンゴパークで各団体の活動状況を発表するブースを作り、アピールをしたのであります。NGO会議でNGO条約が作成され、それに基づいて活動をしていこうと決定をされ、地球環境・地域環境を世界的に考えていくというコンセプトができたわけがあります。しかし政府間レベル(地球サミット)では、多国籍企業問題・南北問題・核・軍勢力の問題については、取り上げられず、表面的なものになった様に思われます。今、全世界の軍事費は、年間約1兆8千億ドルと言われています。そして、この地球環境

を守り人びとが必要最低限の生活ができる状態にするのに約2500億ドルでやっていたのであります。これは一つの例にすぎないのですが、誰の為の地球なのかと言うことを考えていただきたいと思いました。余談になりますが、NGO会議の最終日に環境に対するこれまでの各国の行動・考え方にたいして各賞が設けられました。残念な事に、日本はゴールデンベビー賞(環境にたいしてわがままである)に選ばれました。



ジャパンセンターのようす

「希望」はまだあるのかも

野崎 健 (全港湾建設支部)

5月5日から7月11日まで、約2ヵ月間でアメリカを起点に中南米13カ国を駆け抜け、そのついでにブラジルサミットに立ち寄った野崎さん。一般の参加者とは違った視点からの感想です。野崎さんにとっては、強盗にあい、地元の警察に「はめられ」そうになりながらの一人旅で見た中南米諸国の現実の方がはるかに印象が強く、これらの国が直面する社会的、自然環境の重圧の度は想像以上に深く、パナマやペルーなどではホープレス社会という言葉さえ口に出るほどだったそうです。機会があればゆっくり旅行談を聞きたいものです。

今回、中南米を旅行する機会をえることができて、ちょうどブラジルで開催されていた92エコサミット、グローバルフォーラム(6月1日~14日)と時期が重なったので、6月3日から7日まで、その取り組みを見学したり、催しに参加することができました。

地球環境問題の高まりを反映して、日本からも多くのグループが日本の環境問題をアピールするために奮闘していたり、またツアー観光を含めて多くの一般参加者が訪れていましたが、世界中から環境問題に関係を持つほとんどのグループが、参加すると言うことで、世界の市民運動がどんなものか、とりわけて、環境問題をリードしてい



パナマの繁華街

GEN定例講座

『地球環境を土から見ると』

農学博士

講師 松尾嘉郎さん

とき 7月23日(木) 午後6:30

ところ 大阪市立港区民センター

(JR・地下鉄弁天町南口下車)

主催 緑の地球ネットワーク(準)

☎06-583-1719

る欧米のグループの活動がどんなものか、興味があるところでした。

ただ現代の環境問題の所在を提起し世界的な政治課題たらしめる出発点になった1972年のストックホルムの内容を聞いたり、本を読んだりして想定していたものからすると、いい、悪いということとはべつに、だいぶ違うイメージのものでした。

それは、この20年という歳月が、各国の為政者がいやがおうでも取り組まなければならないほど、運動が前進した、と言うように表現できるし、逆な言い方をすれば、誰もが問題にするほど、警告や忠告にかかわらず、環境の



ペルーの市場



山の中腹に至るスラム・リマ

悪化がおしとどめもなく、際限なく広がった20年であったという、時間の持つ意味合いによるもののような気がしました。

各国政府首脳会議、国家間の条約策定交渉、NGO条約策定の代表者会議、グローバル市民フォーラム、課題別の（先住民会議、都市フォーラム等）会議が、場所的にも時間的にも問題の質的にも重複、交差しながら行われていました。

これらの結果が21世紀を射程にいれて、どのような内容的展開をもたらすものになるか、ほんのちょっとした程度の「にわかエコロジスト」の私ではわからないことが多いですが、世



大統領府を警備する装甲車・リマ

界中が、こぞ一つ一つの土俵で真剣に討論し努力することの始まりであるとすれば、託せる「希望」がまだあると考えるといい、という感想をもちました。



パナマの街角で

アメリカリポート

さかんな学生環境運動

岡崎 祐子
(ボストン大学1年)

私は、昨年9月から米国ボストン大学で環境学（environmental studies）を専攻しています。日本では、文系学部で環境問題とその解決法を体系的に学べる大学がなかったのが渡米した理由です。

大学では地理、化学、生物、地学、経済、政治など様々な分野を必修科目として勉強しますが、授業は全て環境学用にアレンジされています。例えば、地学なら、星や宇宙のことよりも、大気や地質、水の循環を学ぶというようにです。教授も生徒も実に熱心で、授業が討論会になることもあります。また、環境保護のクラブ活動も盛んです。講演会や集会、ビデオ上映にデモ行進など、近くのハーバード大やMITのグループとも連絡をとりながら、積極的な活動を続けています。特にリーダーたちの行動力は目を見張るばかりです。これも、授業外の活動を

学校の成績や、就職活動の際の評価として認めるという社会風潮のおかげかもしれません。

夏休みで帰国している現在、私は前から興味があった、日本の学生の環境問題への取り組みを自分なりに調べています。実に多くの学生が、環境問題に関心を持っていることを知り、大変嬉しく思いました。また、相変わらず大学での学部学科設置は殆ど無いも

の、部活動として運動しているところもあるようで、これらの動きを是非生かして、今後日本での環境教育の充実につなげてほしいと思います。米国でも、白人中心の環境保護グループが多いことや、不況のあおりなど、環境保護運動も転機にさしかかっているようです。経済的に安定している日本の、今後の積極的な取り組みが、今一番期待されています。これからの社会を造っていく若者たち、その一人として私も頑張りますので、皆さん、一緒に頑張りましょう！

青山高原の大自然の中でちょっと一服しませんか？ ナチュラル・ブレイク/サマー・キャンプ参加者募集中！

★とき 8月8日（土）午前11時
～9日（日）午後3時

★参加費 一人3000円（小学生以下
の子供は無料、中学生以上は同額）

★ところ 青山高原保健休養地・キ
ャンプ場
(近鉄大阪線・西青山下車)

★募集数 30人（定員に達し次第締切
ります）

連絡先 ☎06-561-9558 斎藤哲男さん方。または、緑の地球ネット
ワーク内サマー・キャンプ実行委員会 ☎06-583-1719



山西省の自然

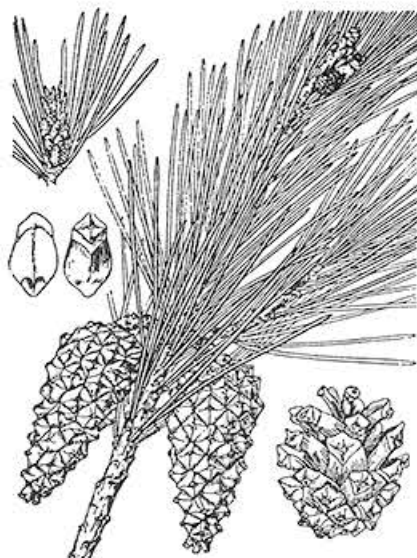
石原 忠一
(第一次緑化協力団団長)

① 樟子松

黄土高原の緑化のエースとして、龍首山プロジェクトをはじめ各地で試みられているのが樟子松（ツァンズン・現地では樟子松とも書きます）です。最初にであったのは恒山を仰ぎみる標高1000mあまりの高原の苗圃でした。みわたすかぎりの栗色の砂質土（カルシウム塩が多く含まれ強いアルカリ性）のうねに、2年もののきれいな苗木が20本ほどずつ寄り集まって育っています。

5月としては珍しい雨に濡れ、みずみずしい緑色の新芽が風にゆれているのは、なんともいえず可愛らしさです。

古代ケルト語で“山”を意味する Pinus 属は、北半球に約 100種ありますが、ヨーロッパから中国東北・朝鮮ま



で分布するヨーロッパ・アカマツ Pinus sylvestris L (ピナス・シリベストリス) の変種 mongolica (モンゴ

リカ) がこの樟子松です。故郷は蒙古東部の砂丘地帯で、年降水量 400mm の黄土 (Loess) 地帯への適合が期待されているのです。

「樟子」とは、これまたヨーロッパから中国東北・朝鮮まで分布する小型のシカ C. capreolus (朝鮮名ノロ、和名ノロジカ) のことです。

日本人は松がとてすきです。お祝いごとの松竹梅、お正月の門松、能の舞台正面の鏡板に描く一本の老松、たいまつ (松明)、マツタケ (松茸)、マツボックリ……、どれをとっても親しみと敬愛の情感が伝わってきます。

歴史のふるい中国の大地は、それだけ長く人間による収奪を受けてきました。それをいま、持続可能な発展のために、広大な緑の万里の長城をきずこうというのは、地球規模の環境保全にとっても大きな意義があり、その決断に私は強い感銘を受けました。

サボテンバザー で GENにカンパ

わが家の改築にあたり、庭に植えていたウチワサボテン (高さ2メートル以上) が犠牲になることになってしまいました。

そこで、少しでも多く株分けして近所の人たちにお分けして、その命を残そうということになり、始まったのがサボテンバザー。自宅の前に、多い時は30ないし40鉢ならんでいたにもかかわらず、盛況で、ほとんどなくなりま



サボテンバザー・深尾宅前で

した。

無料というのもいけないと思い、カンパを集め、その収益を全額 GEN に送りました。しめて約2万円。

わが家のザボテンが各地にちらば

り、形を変えて中国の木の一部になる……。改築・引越の忙しさの中のかの間の充実感のある企画でした。

高槻市天神町・深尾

私の本棚

『エコノザウルスが行く!』

著者：本田 亮

発行：学研

定価：1,800円

今回、おすすめしたいのは環境マンガ集、『エコノザウルスが行く!』です。

色々な環境問題が本田亮さんのユーモアあふれるイラストとわかりやすい解説で紹介されており、大人も子どもと一緒に読める環境絵本に仕上がっています。楽しいイラストのおかげでとても読みやすいのですが、読み終

わって後は、内容の深刻さに思わず顔がこわばる! という奇妙な絵本です。是非一読ください♡

なお、この本の売上一冊につき、13円がWWF JAPAN (世界自然保護基金日本委員会) の自然保護活動資金として役立てられます。

(祖谷公子)



ひとことメッセージ

GENに期待します

加茂わかな(神戸女学院大2年)

ここ数年間、いたる所で「エコロジー」という言葉が飛び交い、やがてそれが瞬く間にブームと化したのを目のあたりにし、私も一個人として、環境問題がやっと民衆レベルに浸透しはじめたという喜びとともに、それぞれの方向に対する不安と、私自身の焦りなども感じつつありました。

そのような折、私の大学で、アジア諸国の13女子大学から成るAWIという団体の総会が開かれることを知り、

あなたに、 あいたい

スタッフ募集のお知らせ

会費を納めて、毎月送られてくる会報に目を通す。それだけでは物足りない、何かもっとできる事があるはず、というあなた。そんなあなたに、編集スタッフ一同からのお願いです。関西在住の方、ぜひ編集にあなたの力を貸してください。編集だけでなく、あなたの助けを待っている事務局のスタッフがたくさんいます。交通便利だけが取柄の小さな事務所ですが、まず一度気軽に、訪ねてみてください。もちろん、お電話、お手紙のご意見、ご協力も大歓迎です。

また、現在事務局では、「緑の地球ネットワーク」の正式発足を目指して各地での出張報告会など、いろいろな活動を計画中です。みなさまからのアイデア、ご意見をお待ちしています。「緑の地球ネットワーク」の活動を通じて、いろいろな人とのネットワークを拡げ、地球の現在と未来を考え、行動してみませんか。

あなたに、あいたい。スタッフ一同の願いです。

学生スタッフとして参加する機会がありました。やはりその場においても、環境は重要なテーマであって、私たちも、各国の方々が自国の問題について語るのを聞いて改めて事態の深刻さと自分の認識の甘さを知らされたという具合。やがて、せっかくだからこの機会に一と有志による学内でのリサイクル運動を発足させ、今も色々な方法を取り入れながら活動を続けています。

この『緑の地球』に挙げられている記事を見ても、地球環境に対する問題は、専門的な分野から日常生活に関わる事まで様々で、広範囲にわたっていることが分かります。そのためか、環境保護のために行動しようと思った時になかなか糸口がつかめないこともあります。実際に少し意識してみると、まわりにはすぐにでも取り組める事柄が多くあることに気付かれます。そういう私も自分の事を見ると、単なる自己満足に終わっている場合が少なくありませんが、まずはなにかしらの関心を大切にすることで、いつの日かそれが具体的な形になれるだろうと感じます。

そういった意味でも、この緑の地球ネットワークには大きな期待を抱いていますし、また参加者の一人として次回の緑化協力団の成功を楽しみにしています。

開発と追われるハブ

杉本大三(京都大3年)

今年の5月、3週間程沖縄の農家でアルバイトをしました。切葉の栽培農家で、私は沖縄のあふれるような光の洪水に負けそうになりながら、鉢の移動や草刈りをしました。沖縄で草刈りをする時、一番注意しなければいけないのはご存じハブです。このところハブをめぐる環境も大きく変わりつつあるようです。

私の働いていた農家は10数年前に海岸近くの密林を切り開いて農地を造成しました。造成当時からずっと、出てくるハブは毒が弱くておとなしいヒメ

ハブだったのですが、最近毒の強い大きなハブが姿を現すようになったそうです。また、近所の人の話では、ハブが増えすぎて事実上耕作できなくなったキビ畑もあるとのことでした。

原因の一端は広範な農地開発にあると思われます。棲み家を奪われたハブが従来ヒメハブのテリトリーだった地域に侵入しているのです。私のいた部落も所々密林を残した谷が見られ、昔はその一帯が深いジャングルであったことをうかがわせるのですが、今はまっ平らな農地が広がっています。

開発の必要性は充分に認めつつ、やはり私は沖縄の自然があちこちで悲鳴を上げているように思われました。

吉川正美(短大講師)さんに 押しかけインタビュー

聞き手：磯川佳子

▼GENのことを知ったのは？

自然気功からの情報で「緑の地球ネットワーク」を知りました。

▼なぜ関心をもたれましたか？

今年の春中国へ旅行に行き、緑の多い国だと思っていたのに、あまりの緑の少なさに驚き、そして現地でのどを悪くし、空気が悪く、中国の環境の現実を体で感じました。

▼募金活動はどういうきっかけで始められたのですか？

亡くなった父が中国の戦争へ行っていたこともあり、中国に対して何か自分ができることがあればと以前から思っていたので、日頃、主婦の方たちにフランス刺繍を教えているので、その場で、自然に、中国へ行って来た体験を話ながら、具体的な活動を紹介して、私たちにもできることで、無理をしない範囲で、苗木代として募金協力を呼びかけています。主婦の方たちもいままでのように協力すればよいかわらなかったので、協力できることに喜びを感じておられます。

▼あとがき

吉川さんの明るい話を聞きますと、

こちららとっても元気になって楽しかったです。

本当に自然にイキイキと活動されている姿がとってもスキテだと思いました。

過疎の山村から見える日本の姿

大森 昌也

ぼくは、10年前、「今の地球生命体の危機を糺すのは百姓だ」と考え、百姓を志した。

都会に居ながらも、小さな田畑を借り、生まれて初めて、クワを手にして、マメをつくながら、耕し、米・野菜を作り、庭トリを飼った。

やがて、亡びたアイヌ部落、亡びゆくかんとする被差別部落に接し、衝撃を受け、「地球生命体の危機のなか、社会的差別を糺す百姓になろう」と、山村の被差別部落に、仕事を止め、裸一貫、借家借地で移住。8年前。

過疎化のすすむ地に住んでつくづく「戦争が一番怖い、同じように過疎が怖い」と思う。人手の入らなくなった山は荒れ、洪水によって、豊かな表土は一気に失われ、戦争同様に社会の衰弱をもたらしている。

その極めが、ひとつの村が廃れるということである。この30年程の間に、平家落人伝承の部落が、数多く廃村になっている。また廃村になろうと

している。

6年まえ、そんな山村のひとつ(30年前12戸70人が3戸6人、平均年齢67歳、廃村寸前)に、廃屋を譲り受け住む。

傾き荒れた家を起こし、修理し、荒れた田畑を起こし耕し、お米・野菜をつくり、小屋を作り、庭トリ、ヤギ、羊、ブタを飼い、近くのお年寄りから炭焼きを教えてもらい、冬場は炭(兵庫白炭)を焼き、又、レンガと土で、パン焼きガマを築き、天然酵母パンを焼いている。6人の子どもたち、家畜たち、山野の野鳥、鹿、イノシシ等の動物たちとワイワイ、元気いっぱい。

今のところ、廃村は免がれた。しかし、廃村の危機はある。家に、ひとりポツンと住むお年寄りの姿を見るにつけ、人間の残酷さを、資本の冷酷さを思い知らされる。

ぼくのところに「農業研修」(炭焼きなど)にやってきたパプア・ニューギニア、タイ、ビルマの青年は「ホント、おばあさん、ひとり」と聞き、涙す、そんな感性の青年にぼくは、ほんとうに教えられ考えさせられる。

パプア・ニューギニアの青年は「田んぼ・畑には、老人ばかり、若い人、お金、お金、レストラン、レストラン、日本亡



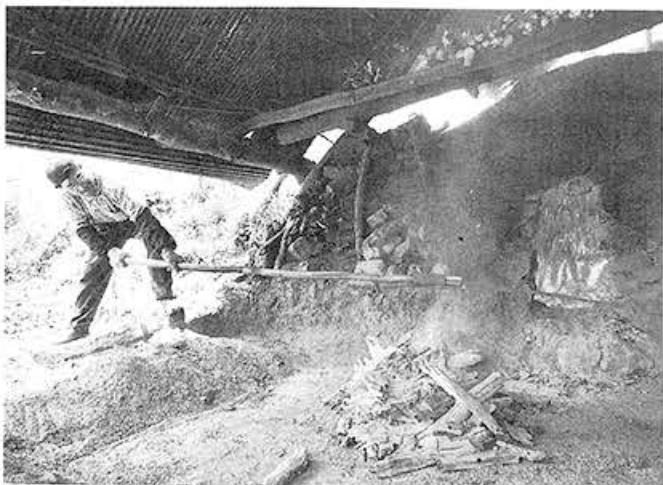
大森さん一家

びる」と言って離日した。また、タイの青年は、「農業も、機械機械、忙しい忙しい、子どもたち、忙しくてかわいそう」と感想をもらした。

最近来た、ビルマの青年は、「大森さん、日本では貧乏だがフィリピンではお金持ちお金持ち」と盛んに言う。

「百聞は一見にしかず」「机上の空論よりクワを握れ」なんて言われてきたぼく、都会に住むあなた、気軽に遊びに来て下さい。

【連絡先】大森昌也／兵庫県朝来郡和田山町朝日／☎0766-75-2959



炭焼きをする大森さん

【編集後記】「緑の地球」もこれで6号です。スタッフも徐々に増えて、紙面が充実してきたとの評価もチラリホラリ。しかし、まだまだスタッフがたりません。1歩前進するのに10歩分の助走とカー杯の跳躍が必要なようで、どうもこれはなかなか大変です。8月のワーキングツアーに参加させていただくことになり、思いはすではるかかなた。という訳で、次号の編集には参加できません。ああホッとした。(林)